

「人間の生きる根拠」

マルコによる福音書 12章 13 - 17 節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、エルサレムの神殿が舞台で、主イエスの言葉じりをとらえて陥れようと考えた人々が、ファリサイ派やヘロデ派の数人を主のところに遣わしたところから始まります。遣わされて主の前に登場した面々は、ローマ皇帝のもとで同胞に権力を振るうヘロデ派と、ユダヤ教の中ではある種革新的なファリサイ派という異質のグループに属している人々で、主イエスを抹殺することで一致し、主の前にやって来ました。そして主に、「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」(マルコ 2 : 14) と問います。彼らは先ず、主イエスをほめたたえて、その後ゆっくりと、刃を突きつけたのです。

エジプトを出てカナンの地を征服したユダヤの民は、その後いろいろな国の支配を受けることとなり、主イエスの時代はローマ帝国の支配下にありました。そのため、ローマへの人頭税を初めヘロデ王への国税、神殿税、通行税など多額の税を納めなければならなかった民衆は、不満を募らせ、機会があればローマ支配を覆して、政治的にも経済的にも自由になりたいと考えていました。そんなところへ主イエスが現れたのです。主の力ある御業や新しい教えに触れた人々は、主イエスこそが自分たちをローマの圧政から救い出すメシアではないかと、思い始めたのでした。

しかし、そのような中での主の答えがもし、「税金を納めよ」であるとする、民衆を失望させることとなり、かといって、「納めてはならない」と言えば、ローマへの反逆者となってしまう…。主は、彼らの狙い通り、まさにジレンマに立たされることとなったのです。

しかしその身動きの取れない状況で主は、質問者の意図を見抜かれ、慌てることもなく、逆に彼らに問い、命令されます。「『なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持ってきて見せなさい。』彼らがそれを持って来ると、イエスは、『これはだれの肖像と銘か』と言われた。彼らが、『皇帝のものです』と言うと、イエスは言われた。『皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい』彼らは、イエスの答えに驚き入った。」(同 12 : 15 - 17) と聖書にあります。

銀貨に彫られた皇帝の肖像と銘、それは、その銀貨のよって立つ根拠を示すものに外ならないからです。この瞬間、主導権は、質問者から主イエスに替わったのでした。きれいな言葉の裏にある罠を見事に外して、すべてを導かれる主イエスの姿が見えます。

この「皇帝のものは皇帝に」は、皇帝の権利・権力を認めているようにも見えますが、主はこの答えを通して、この奥にある深い問題へと私たち人間を導かれています。マタイ 6 : 24 には「だれも、二人の主人に仕えることはできない。…あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」とありますが、お金は、まさに人間の主人にもなり得る悪魔的な力を持っているのです。そのようなお金はその帰属するところへ返すようにと主は言われたのですが、それは同時に、では人間の帰属すべきところはどこにあるのかと、問うておられるのです。人間の表と裏には、一体どのような銘が、印が打たれているのでしょうか。

創世記 1 : 27 には「神は御自分にかたどって人を創造された。」と書かれています。この聖書によれば、人間には神の像と銘が刻まれているということになります。とすれば、神の像として造られ、主イエスによって再度創造され生かされているものである故に、私たち人間の<生きる根拠>は<キリスト>にあり、その帰属するところもまた<キリスト>にあるということになります。「神のものは神に返しなさい」との主の言葉、その中に、人間の罪と悪が刻まれたお金に帰属している人間を、もう一度御自分のものとして奪還しようという、激しい使命感・ミッションを読み取ることができます。

聖書のテーマである主イエスの出来事、すなわち主イエスの<十字架と復活>は、神が御自分にかたどって人間を創造された故の、罪に染まり悪の中にある人間を、もう一度、自らの手の中に奪還するという神の<決意>であり、主イエス・キリストは、皇帝のものは皇帝に、しかし、人間の上に印された神の像、すなわち<神にかたどって造られた人間は神のもとに戻す>という決意・思いを、正にここで私たちに伝えておられると思うのです。

(説教要約 羽入田悦子)